

# リベラルアーツとは何か

～米3大学での調査から～

大西 好宣 (千葉大学)

## 1、発表の目的と背景

近年、高等教育のグローバル化が様々な形で進展するのに伴い、教養教育もしくはリベラルアーツの価値が再認識され始めた。国際教養大学(秋田)のように、大学の名称自体に「教養」を冠する事例が誕生したのに続き、他大学でもその名を冠する学部が今世紀に入って続出している。けれどもそもそも、「教養」が何を指すのか、どこまでのレベルなのかについては実際のところ大学により、また人により千差万別であろう。さらにわが国では、欧米発祥のリベラルアーツに関する基本的な誤解も多い。このような状況を受け、本発表では、1) 本邦大学における、リベラルアーツ教育についての現状と問題点を概観すると共に、2) 2016年秋に実施した米国3大学でのリベラルアーツ教育に関する調査結果を共有し、3) 今後の展望を行いたい。

## 2、先行研究

### (1) 歴史的経緯

山田(2013a)<sup>i</sup>、山田(2013b)<sup>ii</sup>、宮田(1991)<sup>iii</sup>などによれば、リベラルアーツは古代ギリシャの発祥とされている。やがて、それが古代ローマへと伝わった後、17世紀の英国を経て、現代の米国へと継承されたという。また、桜美林大学のホームページや吉見(2016)<sup>iv</sup>によれば、初期のリベラルアーツは、文法・論理・修辞の言語系3学と、算術・幾何・天文・音楽の数学系4学で構成された。これを自由7科(Seven Liberal Arts)と言う。日本で言うところの文系と理系の科目が両方含まれているという点が重要である。

### (2) 日本における誤解と混乱

戦後の学制改革により、本邦大学に米国の高等教育システムが輸入された。その際に生じた誤解について、前出のジャーナリスト山田(2013b)は次のように指摘する。

日本でリベラルアーツカレッジという、一般教養科目ばかり4年間かけて学ぶと思っている人が多い。しかし、実際には、2年生(ソフォモア)終了後に専攻(メジャー)を決めることになっている。そして、3年生(ジュニア)、4年生(シニア)では、その科目を中心に学ぶ。

また、リベラルアーツはしばしば括弧付きで「教養教育」と訳されることが多いが、そのことについて、高等教育を専門とする笹昭(1997)<sup>v</sup>は次のように述べる。

日本の「教養教育」とは異なり、専門と対立する概念ではなく、職業的教科に対する学問的教科を言う。

### (3) 現代における標準的な解釈

そのような誤解を乗り越えた、現代における標準的な解釈を提供するのは谷(2006)<sup>vi</sup>である。彼女によれば、リベラルアーツとは、大学1～2年生のための入門段階の学習に加え、特定領域の集中的・専門的学習も含まれているという。この時、前者(大学1～2年生のための入門段階の学習)には一般教育(General Education)という呼称が与えられているのに対し、後者(特定領域の集中的・専門的学習)には特定の用語がない。谷はこのことこそが、日本におけるリベラルアーツの誤解に繋がっていると指摘し、それを解消するために、後者を便宜上「高度学芸教育」と呼ぼうという建設的な提案を行っている。

## 3、国内各大学による定義

米国での調査結果を紹介する前に、教養系の学部を有する日本国内の主な大学について、各々ホームページ上でどのようにリベラルアーツを定義しているかについて見ておこう。なお、下記(3)及び(4)の2大学は、リベラルアーツを敢えて日本語に訳さず、そのまま学部名として冠している点でユニークである。

### (1) 国際基督教大学(東京)

リベラルアーツとは、文系、理系の区別なく幅広い知識を得た後に、専門性を深めることで、豊富な知識に裏打ちされた創造的な発想を可能とする教育

### (2) 桜美林大学(東京)

リベラルアーツとは元来、人間を良い意味で束縛から解放するための知識や、生きるための力を身につけた

め的手法。(中略) 基礎的な教養を形づくり、人としての根幹部分をつくる学びで、専門の学科や職業課程とは区別される (下線は発表者)

(3) 玉川大学リベラルアーツ学部 (東京)

第一に社会を生きていくための『基礎的な力』、『人間力・人としての魅力』を身につける

第二に、一つの専門分野を超えた学際的な研究を目指す (す)

(4) 帝塚山学院大学リベラルアーツ学部 (大阪)

人が自由に生きるための知識と教養 それがリベラルアーツ

#### 4、米国訪問調査の概要

このような国内状況を受け、発表者は 2016 年 10 月、米国内の 3 つの大学において、リベラルアーツ教育の現状に関する聞き取り調査を行った。具体的な調査項目は、カリキュラムの内容や構成、教員の研修制度 (いわゆる FD) などが含まれる。いずれも国内のリベラルアーツ教育を進めていく上で、今後の参考になるようにとの意図である。また、それ以上の関心事は、大学院レベルのリベラルアーツに関する事項であった。果たしてそのようなものが存在しうるのか否か、仮に存在するとすればどのような形か。そうした問題提起をしたのは、日本においてはまだ大学院レベルのリベラルアーツの成功例が少ない、或いは皆無であるという事由による。

(1) ダートマス大学の事例

ダートマス大学は、いわゆるアイビーリーグ 8 校の中の 1 校であり、全学を指す名称として *university* ではなく、Dartmouth College と今でもただ 1 校 *College* を使用している。リベラルアーツを重視する伝統を重んじてのことと通常は解釈されている。同大において、学部段階は全てリベラルアーツであり、学生は毎年 9 つのコースを 4 年間履修することになる。卒業時の学位は Bachelor of Liberal Arts ではなく、3 年時に選ぶ各々の専門が学位名称に含まれる。同大の教授で、東京大学や慶應義塾大学でも教鞭を執る堀内勇作氏によれば、ダートマス大での授業時間自体は日本の平均的な大学の 8 割程度だという。但し、学生の自習時間が非常に長く、平均して 1 日 5 時間程度であるとのことであった。他方、そうした学生は学習の過程で迷うことも多いため、同大が小規模であることの強みを生かし、教員による学生へのアカデミック・アドバイジングを絶えず重視している。清水 (2015) <sup>viii</sup>によれば、他大学では事務系職員がアドバイザーを兼ねることも多いものの、ダートマスではアドバイザーは全員が教員である。また FD に関しては、日本のように全学での定期的なイベントは開催されていない。但し、ダートマス大では週に一度教員が集まる緩やかな会合があり、事実上その場が教員としての切磋琢磨の場となっているという。また、この大学では学生は原則として、大学院へ進学することが前提となっている。そのため他大学を含め、学生が少しでも高いレベルの修士・博士プログラムを進学先として選択できるよう、情報収集のための学生の強固なネットワーク作りを大学として最大限に支援している。但し、大学院レベルのリベラルアーツ教育には否定的で、実際、既存のダートマス大学院は 4 校中 3 校がいわゆるプロフェッショナルスクールで、残る 1 校は研究者養成のための学術系大学院である。

(2) コロンビア大学の事例

同大もアイビーリーグの中の 1 校である。但し、ダートマス・カレッジと異なり、大学全体の名称はあくまで *university* であり、学部段階はリベラルアーツの Columbia College と、より実務的なカリキュラムを提供する School of Engineering and Applied Science、さらには女子部門として同じくリベラルアーツ教育を実践する Barnard College の 3 校を有する。以下、本発表で紹介するのは Columbia College の例である。同大におけるリベラルアーツは、一言で言えば他大学に比べ必修科目の割合が高いのが最大の特徴となっている。

具体的には、必修科目が約 8 割、選択科目は同じく 2 割程度である。その必修科目は、Distribution Requirement + Core Requirement という構成になっている。ここで、Distribution Requirement = 語学 + 体育 + 自然科学 (一部) + Global Core であり、(Distribution Requirement とは) 日本の大学で言う選択必修科目に近く、米国内の他大学でも多く見られる形式となっている。同大リベラルアーツの最大の特徴は、割合の高い必修科目の中でも、一際存在感の大きい Core Requirement である。全て大学側が予め科目指定しているため他に代替性がなく、学生の選択自由度が著しく低いという点で、他大学では余り例がないとされる。具体的には、Core Requirement は以下 5 種類の科目群で構成されており、1930 年代にその大枠が決まって以降ほぼ不変だという。

1) Literature Humanities、2) Contemporary Civilization (政治学や哲学)、3) Frontiers of Science

4) Art Humanities、5) Music Humanities

中でもとりわけ力を入れているのが 1) と 2) で、3) ~ 5) が 3 年次までに終了すればよく、いずれも 1 セメ

スターで終わるのに比べ、1)と2)は開講される時期が決まっているほか、終了までにかかる時間がより長い。Columbia Collegeでは、1クラスの学生数が最大22名までと決められている関係から、クラスは計63も存在する。つまり、のべ63名の教員がどのクラスでも公平に同じ内容を教えなければいけないわけで、そこにFDの必要性が生まれる。実際、Columbia CollegeのFDでは、全教員が週1度集まり、次週以降の教授方針を確認するという徹底ぶりである。自身も教鞭を執る同大・学部必修科目担当部長 Dr. Roosevelt Montasによれば、1930年代の必修科目開始以降、例えばホメロスのイリアッドを教えなかった年はないと言う。

ただ、のべ63名の教員全員が当該分野の専門家であるとは限らないため、こうした週1度のレベル合わせは必須であると力説する。大学院レベルのリベラルアーツ教育にはダートマス大学と同じく否定的で、リベラルアーツはprofessionalでないから、というのがその理由である。既存の大学院がプロフェッショナルスクールと研究者養成のための学術系大学院であることも、ダートマス大学と同じである。

### (3) パデュー大学ノースウエスト校の事例

前2大学が私立であったのに比べ、パデュー大学は、その設立に際して大きな影響力を発揮した個人の名を冠してはいるものの、歴とした州立の名門大学である。複数あるキャンパスのうち、今回調査に応じてくれたのは、中西部の大都市シカゴの郊外にある同大ノースウエスト校である。同校だけでCollegeが5つもあり、そのうちリベラルアーツ教育を行なっているのはCollege of Humanities, Education, and Social Sciencesである。但し理系科目はなく、その意味では前出の自由7科に代表される伝統的なリベラルアーツの定義からは外れる。

さらに、同大副学長であるDr. Dallas Kennyら教員3名の証言によると、前2大学と異なり、同大ではリベラルアーツ教育を行なっているCollegeを含め中退者の多さに悩んでいるという。そのため、同大では学生の目標設定を早期に明確にさせるよう指導し、どちらかと言うとリベラルアーツよりはむしろ専門(professional)教育を重視している。

また、これも前2大学と異なり、聞き取りをしたどの教員も大学院レベルのリベラルアーツについては一様に肯定的であった。例えばその代表的な意見として、同大の修士課程で専攻が開設されているCommunication、History、English等を学べば、それは大学院レベルのリベラルアーツと呼んで良いのではないかというコメントがあった。これらの科目は実社会では余り役立たない(professionalではない)から、という意味だと思われる。

## 5、 今後の展望：最近の動向から

リベラルアーツをめぐる最近の動向として、従来の伝統的なリベラルアーツの科目もしくは価値に、21世紀型のそれを新たに加えて両者を統合しようとする動きがリベラルアーツ教育の本場である米国にもある。そのひとつが、理工系科目(STEM)のリベラルアーツへの統合である。背景として、現代のように極限まで科学の発達した時代においては「科学技術のリスクをコントロールするため、市民が(中略)理解と判断力を持つこと」が大事であり、同時に「人権や平等など人間的価値の実現のための教育であるリベラル教育とセットで構想される必要」があるという認識が示されている<sup>viii</sup>。また同じ文脈で、医療/看護職の立場から、自らの身体を知ること「身体知」として定義し、リベラルアーツ科目にしようといった主張も多くある<sup>ix</sup>。

いずれにしても、21世紀型のリベラルアーツはその本質を逸脱しない限り、必ずしも伝統にのみ縛られない様々な解釈による多様な発展が考えられる。今後もその動向を注視していきたい。

<sup>i</sup> 山田順(2013a)「日本人の的外れな『リベラルアーツ論』」東洋経済オンライン

<sup>ii</sup> 山田順(2013b)「本物のリベラルアーツを日本人は知らない」東洋経済オンライン

<sup>iii</sup> 宮田敏近(1991)『アメリカのリベラルアーツ・カレッジ』序章、玉川大学出版部

<sup>iv</sup> 吉見俊哉(2016)『「文系学部廃止」の衝撃』集英社

<sup>v</sup> 館昭(1997)『大学改革 日本とアメリカ』玉川大学出版部

<sup>vi</sup> 谷聖美(2006)『アメリカの大学』ミネルヴァ書房

<sup>vii</sup> 清水栄子(2015)『アカデミック・アドバイジング』東信堂

<sup>viii</sup> 鈴木久男ら(2016)「現代のリベラルアーツとしての理工系科目(STEM)の開発と教育実践のために」『大学教育学会誌』第38巻第2号、pp.87-89., 大学教育学会

<sup>ix</sup> 『看護教育』第57巻第12号の特集「身体知をリベラルアーツに」(医学書院発行)における5編の論文を参照